

周辺からの記憶

4. 東日本・家族応援プロジェクト3年を振り返って

村本邦子（立命館大学）

8月末、丸森（宮城県）で開催された「宮城民話の学校」という2泊3日の合宿に参加した。東北には語り部の伝統があり、語り継がれてきた民話は苦難や回復の物語を含む宝でもある。丸森はじめ被災地の民話、3.11とそれ以後のお話を聞いて、思うところがたくさんあった。とても良かった体験は、同室に遠野の語り部さんがいて、寝物語を聞かせてくれたこと。子どもになった気分で幸せに眠りについた。お話の力はすごい。語り部は、間違いなく東北の持つレジリエンスの大きな要素のひとつだろう。最終日はフィールドワークで、福島県新地町、宮城県山元町、名取市閑上の様子を見たり聞いたりもした。

プロジェクト立ち上げから3年が過ぎ、いよいよ4回目の東北巡業が始まる。このあたりで、いったん立ち止まって振り返り、今後の方向性を考えてみよう、3つの企画を立てた。ひとつは出版企画、もうひとつは教育の観点からの報告書をまとめること、そうして、もうひとつが今回のマガジン企画で、中村正・団士郎・村本邦子による座談会。2001年4月に立命館大学大学院応用人間科学研究科ができた時から、このメンバーでいったいどのくらい話し続けてきたのだろう？ここからいろんなものが生まれてきた。今回も、7月24日、16時に集合して、延々5時間。結局、晩御飯も食わずにしゃべり続け、後日テープ起こしたのだが、自分たちのしゃべりを客観的に聞くのは生まれて初めてで、なかなかおもしろかった。そもそも、人がしゃべり終わるまで待つ人は誰もいなくて、次から次へと話はかぶさっていくので、完結しないまま流れてしまう。だからいいのかもしれないけど。今回は、テープ起こしたものに多少、加筆する形で、流れたものを取り戻して形をつけるようにした。

これから現地の方へのインタビューなども計画しているけれど、みなさんからのフィードバックもお待ちしています。

1. 十年実施する ということを支える理論が欲しい

村本：では、始めましょう。何かからいきましよう？

中村：最初に質問だけど、十年やりましようというのは、どのくらい最初から想定していたの？復興やトラウマケアに関する何らかのセオリーがあつてのプロジェクト提案だった？

村本：もちろん、最初からそうだよ。遠く離れてめつたと行けないというこちらの条件と、空間的にも時間的にも大規模であるという東日本大震災の条件とを掛け合わせると、大きな視野で全体を捉えるために、一定の時間経過を見なければならぬ。自分たちの年齢を考えれば、まずは十年でしょう。

中村：それはそう。さらに複合的な人災も含んだ大災害だし、歴史とトラウマに取り組む村本さんなりのもつと別のセオリーがあるのかと思った。とくに諸外国での原発事故にかかわる地域のトラウマや回復のセオリーのようなものが背景にあるのかと思ひ質問したの。チェルノブイリ後のコミュニティのレジリエンスについての研究はどう？

村本：そういうのはほとんどなかつた。ずいぶん前にチェルノブイリのトラウマに関する論文があつたけど、原子力事故に関するトラウマは PTSD モデルでは捉えられないと。ポスト・トラウマにはならないからね。むしろ、癌告知などのように、じわ〜っと不気味に持続していく。終わりが無い (van den Bout, J., Havenaar, J. M., & Mrijler-Iljina, L. I, 1995)。レジリエンスについては、心理学的研究より、ドキュメンタリーがいくつかあつたよね。「ナー ज्याの村」とか「アレクセイと泉」とか。どちらも哀しみを含んでいたけれど。

中村：ここポイントだよ。出来事があつて心的外傷を受け、何らかの流行も含めてケアがあり、回復へと至るといふ筋書きは、そもそも後でつけたようなもので、すべてトラウマを主人公にして話がすすんでいる。それが PTSD モデルの意味だとすると、一般的にも曲解というか、心理化された外傷論になっていくよね。政治経済的、そして民衆もまた共犯関係にあるいろんな事件・事故の全体像がみえなくなっていく。何かというトラウマ話になる。ところで、癌に例えたけど、原発事故のケアが不治の病のケアに近いということは、最後は死に至るので、そのことを踏まえた慢性疾患モデルケアという意味？

村本：疾患ケアというより、体調不良の因果関係が曖昧ということ。たとえば、微熱やだるさ、鼻血が、放射能の影響なのかどうかというのはわからない。単なる風邪や疲労だったかもしれないけど、だんだん死

に近づいているのではないかと不安になったり、抑鬱的になったりする。だからと言って、「思い悩むことは健康に悪影響を与えます」などと心の問題にしてしまって、本来、考えるべきことなのに考えることを阻止しようとする動きは政治的で要注意だと思う。

加えて、情報の不確かさ、政府や社会に対する不信感がある。チェルノブイリから25年。あのときも被爆の恐怖が続いたけど、著者たちによれば、住民のストレスは、強制避難によってコミュニティの絆が破壊されたこと、安全基準の混乱（国によって基準が違ったこと、時間経過とともに基準が変わったこと）、社会階層の高い人々（医者を始めとした知的金持ち）が次々と街を去ったこと、生活変化、とくに子どもたちの生活変化（生活圏、遊び場、食べ物の制限など）、食べ物の安全性の不確かさからきていた。人々の反応は、信頼感の喪失、不信感の蔓延、不安と抑うつだった。放射能事故が与えるインパクトを個人ベースのモデルで捉えることはできない。むしろ、コミュニティや社会との関わりのなかにある。

中村：なるほど。何でこんな質問をしたかという、十年持続して実践しつつ、各地の人たちと協働していく過程で築かれていく理論があると思うから。村本さんの中にあらかじめ理論があって、それを検証するためにやっているのではないですよ。仮にあったとしてもそれは村本さんの関心なので、むしろ開かれた場で、しかしやり続けるなかで見えてくることを「復興の理論」というと大きいけど、何かのかたちで整序できればいいと思う。それがこの3年で、

どのように修正されたのか、されなかったのか、あるいは何か付け加わったのかという意味での質問がセオリーはあったのという質問の意味です。

もうひとつ考慮すべきだと思う点は、時間軸が長いので、当初の出来事よりも、復興とか回復の過程で出てくるネガティブなもの、つまりそれまでの原発政策だったり、復興成金や復興産業だったりがある。しかも東北だけではないのですが原発立地地域に「ただ乗りしていた私たち」、つまりこの社会が持っている歪みが、復興過程自体に還流し、逆流してくるよね。そういうことは、安全を強調し、危険を過小評価する専門家の発言など事故の当日からもあったし、最近でもたとえば、甲状腺癌を否定するとかの「研究発表」があり、そういうこと自体が回復を悪化させるよね。それとの闘いがあるよね。もちろん逆のこともあり、最近では福島的女性が自殺をしてそれと原発事故の因果関係を認める判決が出されて東電に賠償金の支払いを命じました。プラスとマイナスのジグザグ道をたどりながらの復興なので、それらとともに訪れる地域の生活があり、そして私たちの日常をどうするのが問われるということです。それらをどうするかも引き受けて、理論の構築が十年の証人の言語化として期待されているということだと私は思っている。私は村本さんの提案をそう受け取ったし、そう意味ではやりがいのあるプロジェクト提案だと思ったから参加している。この「ただ乗りしている私たち」は社会の病理性それ自身。もちろん、米軍基地もそうだし、これまで各地で経験した公害もそう。地域のもつ政治、地政学的な関心もあつての質問で

す。そういう点では、この3~4年はどうだったのかな。

村本：もともと理論モデルがあったというよりは、直感レベルでやってきたことだけだ。

中村：それは村本流でいいと思うんだけど。ただ一緒にやっている者としては、どこかでセオリーというか、何をやってるのかというディレクションがあった方がいいかなと思って。証人になるということの結果として、こうして言語化していくことになるのだから、その指針みたいなものが参加している人たちと、そして地域と一緒に協働してくれる人たちと創造していければよいかなと思って。出会い頭につくっていく仮説みたいなものでもいいのだけど。来年度にむけての中間的な成果を出版しようというに賛同したものもそういうことなんだけど。

村本：戦争のトラウマをやってきたことが大きいと思うけど、復興の途中で一部分だけ切り取って見ると気づかないことが多く、その背景にある大きな流れのなかに置いてみて、初めてその歪みがわかるということがある。たとえば731部隊から薬害エイズにつながる流れや、反核運動から原子力の平和利用、そして原発という流れ。人命よりも経済効率を重視する価値観。それは、今の政府、企業、大学のあり方にもつながっていて、まんまと騙されてしまう自分たちがある。

中村：そうなんですよ。私が社会病理学や社会臨床論とやっていることと同じです。放射線はレントゲンと武器の双方に、薬物は依存症と医療のそれぞれに、公害は産業

社会と裏腹に、病いは偏見と差別とともにという具合にきりが無いくらいのテーマがでできます。もちろん社会運動の側、左翼の運動の弱さもある。政府だけでなく批判勢力が対案を創りきれない弱さもある。

村本：それはそうだよ。反核運動のなかに原子力の平和利用があり、いつでも原子力が使えるような現状が作られてきたんだから。だから、3.11の復興においても同じことが起こり得るでしょう。その時に、なかに埋め込まれていたら気づきにくいけど、距離があるからこそ見える現実があるかもしれないと、とりあえず十年。人々の意識とか社会の温度とかマスコミの言説がどんなふうに変化していくのか、意識的に見張っておく必要があるのではないかと。

中村：これらの諸点は、応用人間科学研究科で一緒に取り組む教員たちの間でも、まだ十分共有されてないと思う。十年間やり続けて証人になるということの意味を質的にも理論進化という点でも高度にしていくべきだと思う。当面は、十年やるために予算どうするかという現実的なレベルでの意識が大きいし、現に課題があるんだけど、そのためにもこの実践の理論化、言語化をしていく必要がある。

村本：私としてはずっと言ってきたし、共有していないとしたら残念だけど。

2.

歴史とトラウマの経過に学ぶ

中村：もちろん基本的なことは共有しているんだって。下地は作りつつあると思うけど、もっと仕掛けを作っていく必要があるかなと。あえて可視化させたり共有したりしていくという課題として。村本さんの直感はいいんだけど、それがどう変化していったか。3.11を忘れないということは基本だけど、復興過程論としても証人となるべき論点があり、それは醜い面も含めていくということだと思う。

村本：確かにね。人との出会いというミクロな層から、社会や政治のマクロな層まで、証人として多層的に関われる仕掛けになっているはずなんだけど、なかなか見えにくい。

中村：私にそうした層がみえてきたのは、南京に行ったからということがあります。面白かったのは、むこうでやっている人たちが三世代目で、被害はおじいさんやおばあさんの世代で、そこで日本語勉強している大学生が第三世代だったってこと。そこには文化的な交流があって、ゲーム、アニメ、ジャニーズなどの日本文化に関心があって、さらに我々の身近にはメイドインチャイナを支える中国の安い労働力を背景にした安い物があふれている。つまり、文化と経済はとっくに国境を越えているのに、なおも操作されている政治だけがハードル

のようにある。従軍慰安婦問題も、都合良く外交カードや政治に利用されていますよね。世代を越えてトラウマがあるとすると、過去の出来事があったと認めるということもそうだし、そのことを現時点でどう今の世代が引き受けるのかという責任が問われていることがわかりました。震災復興も同じで、その過程が問題となり、時間の経過とともにある復興過程のあり方でトラウマからの回復が変化していきます。そこには日本社会に生きる者としての責任があります。

つまり、復興に過去の反省や謝罪の具合が反映されたり、未来に向かう原発政策について、脱原発化として今の私たちが選択できるかどうか問われます。文字通り「ただ乗りしている私たち」のあり方が日々のなかで問われてきます。こうした視点は、村本さんの取り組みである南京プロジェクトに参加して見えてきたことなのです。私なりに3年経過して、他の分野も含めて、そして自らの取り組む暴力問題にも反映させて、いろんなことが繋がっていると思えたことが大きいのです。その理論構築のあたりをフィードバックする必要があるんじゃないかな。

3.

通奏低音のように～ いつか誰かに届く、 継続と持続の大切さ

村本：そうだねえ、そういう意味では、無自覚なまま加害者ポジションにあった、つまり、中村さん言うところの「ただ乗り」組の私たちが、今回の震災によって露呈したものを引き受けていく覚悟をするというのか。いつの間にか、また元のポジションに戻ってしまうことのないよう、細くても長く被災地に関わり続け、証人として存在することが、結果的には、刻々と続いていく現在を自覚的に担っていくことにつながると思うのよ。それは、私たち自身のためでもあるけれど、めぐりめぐって被災地の人たちへの応援のメッセージになるんじゃないかな。

団さん、何か思うことある？

団：俺なんかは、この時間経過のなかで、わかりやすいところでは、漫画展をやっているやろ。それを材料にこちらが投げかけている物に対しては、具体的な反応がある。そしてもうひとつ冊子（木陰の物語文庫本）もあって、これは私がいなくても動いていく。3年の中でその意味とか、見てもらえる人とか、そこからのフィードバックが、どんなふうに変わってきたか、振り返れる事実がある。

冊子も最初は先ず、現地に残って子育てしている親たちに、保育所、幼稚園を通して届けばいいというのがあった。被災直後は、とにかく被災地の瓦礫の片付けに行きましょうという、わかりやすいところだった。しかし実は、被災は日本全体だった。世界の人々は日本が被災したと思っていたけど、日本では、関西は遠くて大丈夫だったと思っている感じがあった。でもそうで

はないことはだんだん私達に届くことになってきた。

ところが、あんなことがあったのに、鹿児島川の川内では、全国で一番最初に原発再稼働が決まったりする。関西は大丈夫、離れているから大丈夫という感覚と、こういう流れは相似形だ。

東北と私達は離れていると何となく思っていたのが、三年の関わりで、実はどこもつながっているなということが、ずいぶん見えてきた。さっき中村さんの話を聞きながら思ったのは、世の中のネガティブな動きの持つ自己弁護性みたいなモノもちゃんと見ていかなあかんと思った。逆に私には今、展覧会や冊子という具体的なものの動きで、届く人たちがたくさんいるんだなというのがよく見えてきたというのが自分の認識やな。

村本：私の側から言えば、世の中がネガティブに動いていくことに対する抵抗として、社会にメッセージを発していく力があるのだと思う。長く女性支援をやるなかで経験してきたことだけど、被害者にとっては社会から届くメッセージが大きな意味を持つんだよね。たとえば、誰にも言えず一人で苦しみを抱えている性暴力の被害者にとって、社会から、一般論として「被害者にも落ち度がある」というメッセージが届くのと、「性暴力は不正義であり、悪いのは加害者である」というメッセージが届くのでは雲泥の差。それは、性暴力によるトラウマというものが、加害者/被害者という二者関係で起こるものではなく、社会との関係のなかにあるということを示すものだと思う。

まだ社会の中でほとんど理解が得られない時代、性暴力の問題に取り込んでいる人がいますよという私たちの活動を紹介する新聞記事を見て励まされたという声が、時間経過を経て聞こえてくるという経験をずいぶんしました。ずいぶん上の世代の女性が、「このことは墓場まで持って行くつもりだったけれど、これを見て、時代は変わったんだなと希望が持て、直接会ってお礼を言いたかったんです」と1度だけカウンセリングに来られた方があった。その方がカウンセリングに求めたのは、心のケアではなく、直接会ってお礼を言うことだった。あるいは、5年とか10年とか経ってから、「実は、あの時、本当に励まされたんです。ありがとう」と言われるなど。そういう経験を重ねて、きっと、これは氷山の一角なんだろうと思うようになった。つまり、無言のままに何かを受け留めてくれる人たちがいるんだろうなど。だから、たとえば、こんな企画をやりますよという記事を書いてもらって、直接参加につながらなかったとしても、その記事が持つメッセージ性のもつ意味は大きいと考えてる。

だから、阪神淡路の時の反省もあるけれど、とにかく十年やっていますということが持つメッセージ。具体的にやっていること以上に、この問題を見失ったり、忘却したりせず、十年考え続けようという、そういう呼びかけをすることがどこかの誰かに届いていくんじゃないか。そういうことの積み重ねが抵抗につながるのではないかという予感があるわけ。

4. 回復する日常を みつめる

中村：同感です。十年の証人はその都度、ぎりぎりまで言えることを思い切って言っておくということが必要なのでしょうか。その際、援助らしくしていないところがいんじゃないのかな。ファースト・エイドであれば、緊急性が大事なので、援助そのものが要るのでしょうか。このプロジェクトは間接支援がメインなので、むしろ時間が経つにつれ、日常になっていく経過を共有できればと思っています。団さんの漫画も、特段、被災を描いているわけではなく、家族の物語という日常をそこに持ち込んでいるだけだし、それらをトータルにみると、それぞれが自らを力づけていくという意味での家族支援と言っているわけだから。支援の意味はこういう地域や人々のレジリエンスに働きかけるという意味での支援なので、あえていえば回復する日常の声をたくさん集めておくということでもある。

村本：最初から言ってきたことだけど、日本的なのか、アジア的なのかわからないけど、文化的に言って、ストレートに「これを提供します」、「はい、ください」というような援助関係より、何か別なものを介らせて、そこから相互的に生まれてくるものが力になると思ってる。開業でカウンセ

リングやっている分には、ニーズがある人が来るわけで、西洋的な専門家モデルで何ら違和感を持たなかったけど、阪神淡路の時、ひとたびコミュニティに入っていくとなると、文化的に適合する仕掛けがいるんだなと思うようになった。明確な動機づけのない人たちには、目的性を持った働きかけをするより、ただ傍らに居ること。でも、関係性のないところで何もせずに傍らに居ることは難しいから、何かを一緒に作りながらとか、お茶を飲みながらとか、ボール投げをしながらとか、何でもいいんだけど、そうした枠組みを設定することで、自然な形で時間を共有できる。日常性を共有すると言えるのかな。そのなかで、話してもいいけど、話さなくてもいい、一緒に時間を過ごすことに意味がある。それは本当のところ何でもいいんだけど、団さんの漫画展というのはなかなかいいなと思ったわけ。

団：今年 4 年目になるやんか。2 年目、3 年目はそれほどなかったように思うけど、今年 4 年目に入ったら、「続けてやるんですね」という反応が耳に入ってくる。先日、家族心理学会でも、展示を見て、「立命はずっと続けてはるんですね」と。何をやっているかということより、ずっと続けているということの方に大学関係者の反応がある。やっぱり、みんなの中に、自分も含めて、ほどほどこれくらいかというのがあるのよ。何が起こっても、良心の発露というのはあるわけだけど、人の噂じゃないけど、75 日とか、1 周忌とか 3 回忌とか、次は十周年とか。俺は続けると言えば続ける人間やから、そうも思わへんけど、続いているものに対して人が感じる意味っていうのを感じ

たというか、4 年目なんて中途半端やろ。そこに結構、みんな反応してたね。そやから面白かった。

中村：家族支援と言っていて、世代をとおして家族は続くし、記憶に残るし、持続する支援というのは地域の日常からすれば当たり前という気もするけれど。

村本：日常性を取り戻すことは回復の第一歩でもあるだよね。1 年目の福島の支援者支援セミナーでは、支援者たちが本当に厳しい状況のなかで頑張っておられたのだけど、話をしていくなかで、被災後も鉄道模型のグループを続けていること、クリスマスツリーを飾ること、干し柿をつるせることなどが力になっていること、つまり、去年やおととしと同じように今年もできるということが力になっていることがわかってきた。だから、私はあえて福島では、子どもたちと一緒に、毎年、クリスマスカレンダーを作るという同じプログラムをやることにしてるの。そうすると、毎年続けて来てくれる子どもたちがいるんだよね。この時期が来ると、このプロジェクトがやってくる、「ああ、1 年経ったんだな」と、私たちが行くことが、その地の日常の一部になったらいいなと。

今の社会、何も安定して続かないでしょう。政治家も政策もコロコロ変わるし、予算のつきかたも頻繁に変わる。そんななかでも、これまでの経験から、こちらに核があれば、どんな予算のつき方できても、切り口を工夫することで継続させていくことができると思ってきたし、移ろいやすい世の中であっても、細くても安定的に同じこ

とが続くということが安心とか信頼につながるのではないかなと。大学でも、基本的に予算は単年度ごとによって変わっていくけれど、それでも、予算のつき方に関わらず、やっていますという姿勢が必要だと思ったのよ。

5. 変わらないものを みつめ、大切にする

中村：それはわかります。時間とともにニーズのくみ取り方が変わって、支援にかかわる制度が科学的な根拠もなく変化していくことには注意が要ります。いじめや学校の事件があればスクールカウンセラーが制度化され、学校の教師もカウンセリングマインドとかいいだしました。その後はさらにスクールソーシャルワーカーが入りだしています。また、日本はとても発達障害というラベルが多くなりすぎていると思います。それに対応してコミュニケーション技術の講習とかが多くなっています。こうしてニーズが常に変化していき、中途半端に制度化された「仕事」が導入され、それぞれ何をしているのかわかりづらくなっています。肝心の教師は、本来の教育以外の事柄への対応で疲労がたまっているようにもみえます。補助金もそうですが、いろいろなものが変わっていくじゃない、そういうのをもっと批判すべきなんだけどね。コロコ

ロコロコロ変わって。

村本：そう、だから、それに対する反発があるのよ、十年十年と言うのには。それに、やっぱり原発がショックで、未来の子どもたちのことを考えたら、大人たちに責任があるし、気づかずにきた自分の責任があって、何か行動しなければというのもある。

中村：「ただ乗りしていた私」として自分に返ってくることの自覚、省察、反省とともにこのプロジェクトがあるということと重なります。私は、「きょうとNPOセンター」に長く関与してきました。地元でも保育、学童、PTA等にも関係してきました。コミュニティづくりをしています。地元の小学・中学でPTA会長してたことあるんだけど、小学校にある大きなクスノキだけが変わってないんですよ。130年の歴史があって。校舎も街も変わっていくけれど、変わらずあるというシンボリックな意味があって、そう考えると、福島には立ち入れなくなるじゃない。立ち入りのできない地域ができる、つまり地域を消してしまうという、これが犯罪的だよ。もちろん、アウシュビッツも負の街になっていくわけだけど。消し去ってしまうことのもつ衝撃は大きい。

村本：一人の命は短いけど、歴史を持ち続けてきたもの、たとえば、教会とかお寺とか、社会が変わっていても残っていくものがある。そういう意味で、大学にも一定の意味と責任があるよね。

中村：そうです。時々、運営の都合で変え

てはいけないものがある。その大学のミッションがそうですし、シンボルもそうですね。そして何よりも何百年と持続させる責任が現在を生きる人間にはある。コモンズだよ。

団：ぜんぜん関係ないけど、この前、仏光寺の中の小さなお寺のギャラリーで漫画展やってただけど、そこに祇園祭のゴミゼロ運動とかいうのやっていて、仏光寺さんに協力要請に来たとかで、きょうとNPOセンターの野池（家族応援プロジェクトと連携して、福島にも同行した応用人間科学研究科の第一期卒業生）が偶然やってきて。京都は狭いなと思ったわ。

中村：それは京都の環境NPO等と大規模にやってる、なかなか評判のいい活動なんだけ。

村本：それがコミュニティということだよ。

中村：だから、ファースト・エイドは別にして、とにかく、支援とは何かというのが根源的に問われてくる。日常があって、個人の物語から社会の物語まで。社会の物語のなかには汚いものも含まれていて復興過程において見えてくる。個人の物語の自由に生きることができる物語だけではなく、地域にいけばいくほどそのしがらみのなかでの物語になる。原発立地地域を財政的に優遇してきた措置のなかで、賛否両論のなかを生きることが強いてきたともいえる。つらい生き方を押しつけているともいえます。だから、その幅もふくめて理解をする、

どんな具合に復興が進むのか、清濁かきまぜていく復興の渦があります。歴史にその都度決着をつけてこずに、引きずるものを持ちながら日本社会の無責任の体系があり、今をかたどっています。731部隊のことも引いたけど、医学の歴史はクリアに戦後と戦前にわかれません。3.11前後でそんなに切れ目ができる原発政策ではありません。連続していきます。ますます矛盾を深めるのでしょ。汚染がれきの処理については地域のエゴもでてきます。証人になる時間が十年は長く、攪拌された清濁あわせたものの証人になるのは決意が要ります。

6. 個人の物語を 起点にする

村本：南京のプロジェクトをやってきて思うのは、パーソナル・ヒストリーを束ねた歴史が必要。遠くから東北の復興を見ている、マスコミを通じて大きな物語は見えてくるかもしれないけど、パーソナルな多様な物語は見えてこない。年に1回であっても、現地に身を運び、そこでパーソナルな出会いをすることで、それをつなげて見える歴史があるように思う。

中村：トレーラー・ハウスの保育園の話、それを牽引した園長の、それはおそらく震災以前からあったその人のパーソナル・ヒ

ストーリーの展開形態だと思う。もちろん3.11でその人のパーソナル・ヒストリーも大いに変化したのだろうけど、強化された面もあるように思いますよ。生きてきたように復興の物語をつくるんだと思います。そこには渦ができて、パーソナルなんだけど、社会的な物語も生じてくるし、賛同する人も広がっていく。いろんなことが重なっているよね。

村本：去年は、その園長先生にインタビューさせてもらったんだけど、そうすると、1人の女性のキャリアの物語が見えてきた。保育園経営という計画の進行を震災が早めたにすぎないということ。そこまで詳細を追えないかもしれないけど、たとえば、プログラムを通じて継続的に出会った親子の話から、断片でしかないけれど、ひとつの家族の物語が見える。被災の影響が大きく見えていた1年目から、だんだんと日常の家族の問題になっていく。病気や老い、そして子どもの成長。震災が負荷を与えて、時間が早まっているだけ。池に投げられた複数の大きな石の波紋の話だけど、何か所かで波紋を拾うことで、少し全体像が見えてくるかもしれない。中に埋め込まれていると、目の前のものはよく見えても、自分を含みこんでいる大きなものは見えにくい。日本の外にいる方が、日本全体がよく見えるように。時々、中に入ることで小さなものを拾いつつ大きくとらえることができたら。

一環した視点で見続けることほど支援になることはないなという信念みたいなものもある。それは、トラウマを生き延びた人たちのカウンセリングで感じてきたことだ

けど、支援者には本当のところできることなんてなくて、とにかくしっかり見ているということに尽きる。ストレートな支援ではないかもしれないけど、十年、私たちは見えていますよということがサポートになるかと。

中村：アメリカで活躍する、犯罪者の社会復帰支援団体の「アミティ」のワークショップにでたことがあります。京都の法然院でした。団体の主宰者のナヤ・アビータさんが講師でした。ワークショップの最後に、こんなワークをしました。一年後の自分に宛てた手紙を書いてくださいと。封をして、自分宛のアドレスを書いたのです。それが一年後に届きました。アミティのメッセージ・カードと一緒に。そういうことを実際に何年か年単位でやってるんだと。受刑者たちがそこを通過するんだけど、何通か書いてもらっておいて未来の自分宛てに、その時々アミティのメッセージと共に送り続けるんだって。それだけ、人の回復には時間がかかるという取り組みでした。私たちはずっといまして。さっきの村本さんの性犯罪への取り組みとも重なりますよね。いい取組だなと思って。

村本：そうそう、ずっとそこにいるということの意味は感じる。二十数年、研究所を維持してきたけど、カウンセリングを卒業した人たちが、密かに、時々、研究所の存在を確認して安心するということがあるんだよね。「灯台のよう」と言ってくれた方がありました。

中村：この間、一緒にイギリスにもいった

けど、例の「からのゆりかご」(映画「オレンジを太陽」の原作名)のこと。あれも同じで、何十年たってからの気づきですよ。しかもすごい歴史的事実をひとりのソーシャルワーカーが発掘していくのです。そこで児童移民基金のいうライフストーリーワークがいるんですよ。移民たちのように。自分がある根拠がわからないから。

団：そやからこそな、会場を転々として展覧会に何人参加者が来ましたということよりも、人数少なくとも、去年も来ましたよという人がいる方が、その人にとって、それはサポートィブで、すごく幸せなことやんか。去年があって今年もある、そして来年もあるということの意味。

中村：そうした視点こそが十年続けて、復興の証人になるということの意味ですし、間接支援として定点の地域で協働していくということかと。だから地域でのパートナーを見つけるといことも大きいよね。むつはそうした点では安定しているけど、他の地域はどう？

7. 協働する 支援の形をつくる

村本：福島はそう。多賀城はそうなるといいなと今、思っているけど、岩手はまだこ

れからというところ。そこが、私の予測を越えていたところで、津波の破壊力のすごさを改めて感じた。

団：それは何を破壊されたと思ってるの？

村本：何といっても建物、ハード面と、人々のネットワークというソフト面。海岸線さえすっかり変っちゃったから。

団：う〜ん。俺は、その状況に入る人たちの援助の落ち着きのなさやと思ってるけど。場所はあるやないか。そんな大層な会場を求めているわけではなく。

村本：でもね、やっぱり沿岸部はね、物も持っていかれたし、人も持っていかれた。マガジンにも書いたけど、半年後の岩手で、宿泊施設がないから、沿岸部に車で一時間という遠野に全国からボランティアが集まり、毎日、日帰りを通ってた。混沌とした状態だけど、機動力があって機能していたよね。良くも悪くも、誰がリーダーかさっぱりわかんなかったの。無秩序だったけど動いていた。そこでは、明日のアポさえ実現しない。眼の前のことで一杯いっぱい。私たちがやろうとしているのは、あってもなくても生きていくのに必ずしも不可欠というわけではないもの。それを受け取る余力はない。もちろん、年々、時間経過とともに変化しているけれど、変化しないままのものもある。福島はまた、別のものを抱えているけど。

団：そらな、もちろん、そういう側面もあるやろけれど、わかりやすい被災はわかり

やすい援助がずっと入るで。福島なんかそこですごく屈折するわけや。むつだって、もっとそうや。

中村：以前、朱雀で映画と対談を企画しました。お二人にも対談してもらいました。その時『傍-かたわら 3月11日からの旅-』（2013年2月16日（土））を上映しました。それは地元のFMラジオ局の記録です。印象的なシーンは、ひたすら、無くなった方の名前を読む場面でした。ラジオでその名前を聞きながら、避難所で地元のお年寄りたちがその人の思い出を語るのです。そんな具合に生きていたリアルな姿が浮かんだのです。そこで日常が回復していくことに安心していく。コミュニティがそこで見えてくるのです。

村本：そこで「心のケア」が邪魔をする。「何ができるんですか？お絵かきボランティアですか、心のケアですか？傾聴ボランティアですか？何か言ってくれたら、それを求めているところにつなげます」と。わかりやすい概念を人々も欲している。

中村：どんなボランティアであれ、じわじわとそこに日常が戻ってくるのが大事だと思う。仮設住宅はそうした意味で地域が根こそぎ移動しているし、原発被害での立ち入り禁止区域というのもつらいです。生きた場所で死にたいという思いは強い。

団：宮古の街では、おじさん、おばさんやらが漫画展の会場に来て、被災のこと

をあれこれ話すようになっていた。そこに外部から支援に入っている人たちの話を聞いていて、今の街の状態とずれているのではないかなと思ったもん。

村本：立ち寄って話をしていけるおじさん、おばあさんたちは、自然な流れのなかで日常を取り戻していける人たちだけど、たとえば3年目の仮設住宅で見たのは、時間が経過しても先が見えない層とそれを支援している人たち。

団：地域社会はもともといろいろな問題を抱えていて、貧しい地域もあれば、過疎もあり、被災のせいで早まってしまった絶望とかもある。俺らはさ、めったに行けへんと覚悟決めて、こんなことしかできませんけどという前提で、お役に立つかどうかはお宅らが決めてくださいと言ってるからさ。

中村：ボランティアも定点みたいにして関係ができることもあるけど、どちらかといえば落下傘部隊みたいに来る人たちのようなでもある。このプロジェクトはできればパートナーを組んでやっていきたい。むつで言うと、民生委員が動員されてくるとか、課題はあるんだけど、ローカルになればそういうのもありかなと割り切れてきます。パートナーを組んでもらっている方々との関係性なので、「間接支援の理論」が必要かなと思い始めました。これは私のなかでは新しい発見なのです。間接支援はその地域によって違うのです。どんなスーパーバイズをすればよいのかという論とも重なります。こ

ちらも技術を高めていかないといけないところだね。

団：やってる二人は、どう構成したらいいかといろいろ工夫を凝らしているにしても、向こうにしたら、そんなことはわからなくても、とにかく、大学から先生が毎年来てくれるという、これはありがたいという気持ちが素朴にあるよ。そういう意味で、ピントのはずれた感謝もあるかもしれないし、それに市町村行政と県行政との意識の差というものもある。

中村：そう、なんか了解しなければいけないものがあるんですよ。

団：あと7年とか、そういうふうを実現するイベントは、仕事として想像できない。役所の仕事ではできない。いつまで私がいるかわかりませんからということになる。そういう意味では、地元の小さな民間企業なんかの方ができやすい。でも、そういう習慣がないからね。

中村：変わらずそこにあり続けるというのがいいよね。

村本：個別にはいい人がいても、組織力がないとできないからね、このプロジェクトのミソは地域の人との協働なんだけど、そこが難しいところだったね。

中村：パートナーシップも大事だけど、こちらが何をもち込んでいるのかということをも自覚することも大事だね。とにかく、毎年、出発点は下北で、最終点は福島という

地図が重要だよ。あの地図があることがね。

8. 「復興で学ぶ」活動でもある

団：きのうの研究会で、院生たちの思いを聞いて、これまで行く機会がなかった奴らをいっぺん連れてってやるのはええことやと思った。やっぱり、遠いとか、どこ行ったらいいのかわからんとか。行って何を感じるかはそれぞれやけど、少なくとも、行ってみたという立場でものを語らせたり考えさせたりすることは、教育的にすごくええことやと思う。

村本：そう、教育的な観点は最初なくて、途中から見えてきたものだけど、やっぱり、今、動いている人たちの原点が阪神淡路大震災だとすると、今、関わっている院生たちが、何らかの形で来るべき災害に貢献してくれることにつながると思う。それって、いいことだね。

団：そして、できれば、同じことがまた起こったりしないために、何を市民社会ができるのかということを考えられるようになったらもっとええじゃないですか。

中村：サービ斯拉ーニングの評価でもっと

詰めないかんところなんだけどね。

団：そのプランで、行ったやつに何か負荷をかけるか。

中村：その方がいいかもしれない。学習の転移が起こることを、個別に丁寧に見る必要がある。サービスマーケティングという言葉もわかりにくいので開発したんだけど、とにかくどんな学びになったのという評価論が要る。

村本：教員主導でなく、院生それぞれがテーマを見つけて発展させていって欲しいと思って、今年は、だいぶ工夫を凝らした方向づけをしてきたんだけど、それなりに手ごたえはあるかなと。院生同士で語り合うとか自発的な動きにつなげて欲しい。大学院のサービスマーケティングなんで、教員がひとつの方向に引っ張るのでなく、おのおのが学びを作っていく。

中村：そうならいいよね。そういう意味では、前後、教員と一緒にいない方がいいんじゃない。

村本：それがそうでもなくて、ある程度まで、やっぱり話してやることも重要なんだよね。私は放任主義のところあるから、もう少し親切にした方がいいんだなということも学んでいる。今の若い人たちの弱さなのかもしれないけど、どのくらいまで援助して、どのくらいで手を引くかという兼ね合いが難しい。

中村さんが、最初のシンポジウムで、ニーズはどこにあるのかって言ったけど、結

局、ニーズはこちらにあったんだよね。むつの漫画展だけは、むこうにニーズがあったわけだけど。

中村：でも、ニーズは作っていったらいいんだから。支援者支援とか、お父さん支援だって、外から持ち込まなければ見えてこない。

村本：ニーズって、世の中の流行によって作られてるところもあるでしょ。

団：それに、被害者、被災者になって初めてニーズが生まれるというのものもある。自分が知らなかったところに一歩目が開かれるのはいいことだと思う。

中村：そうなのよ。学会なんかでも、異分野の人を呼んで話を聞くことがある。私も異分野の人として呼ばれて話すと、それはそれで面白い出会いになって、それを楽しめるようでないとね。なんで漫画展なのかということ問いながらです。

村本：それは重要だよ。外から異質性を持ち込むことがひとつの意味だよ。災害復興に関するある本に書いてあったんだけど、発展途上国に大きな災害があって初めて世界中からボランティアが訪れ、新しい価値観の組み換えが起こると。東北でも、良い意味も悪い意味もあると思うけど、震災をひとつの契機にして、わっ〜と外から風が吹き込んだ。その時に、対人援助職者としては、思想というか、バックボーンがいるよね。そうでないと異質の出会いを楽しめない。上から眼線の押しつけ、余計な

お世話になってしまう。

中村：そう、ミッションがいる。ただ、その外からの風をどんなふうに取り取られるのか。それはまだ課題があるよね。哀しいものもあるよね、自衛隊だったり、原発だったり、外から来るものはネガティブなもの、論争的なものだったりというところもあるからね。

団：たまたま夜、TVドラマ観てたら、大昔やってた「若者たち」っていうのを配役変えてやってたけど、怒るは泣くはわめくわで、こんなドラマ、今、もうTVではやらへんなと思った。勸善懲悪の水戸黄門のヴァリエーションみたいなわかりやすいものしかやらない。

村本：ほら、遠野物語の三陸大津波の話、一年目に遠野に行った時、たまたま林隆三が第99話を朗読したんだけど、その話たるや、定番のプロットが全然見えない。津波で死んだ奥さんがあの世で以前、好きだった人と一緒にいるという。私たちにまったく馴染のないわかりにくいプロットなんだけど、そういうのを許容するというね。その後の話もおもしろくてね、たまたまNHKでやってたのを見たんだけど、その子孫にあたる男性が出てきてね、母親からその話を聞かされて、ずっと受け入れられずに憤慨していたんだけど、このたび、その母親が津波に流されて、だんだん受け入れていくと言う。

団：遠野物語って、みんなそんな話やったやろ。

9. むつから始まる

村本：今年もまた、むつから始まるね。むつに絞って振り返るとするなら、あらためてどうでしょう？

団：俺なんか、むつに何回も行くなかで、外側にある大きな力が、土地とか地域社会を好きなように触って、好きなように放ったらかしてというようなことをやるんやなあと思った。やられ放題の下北半島というのは、原発関連よりあの市役所行った時、一番思った。自治体規模に似合わない立派な市庁舎を立てて、住民が文句言ってるころは日本中あちこちにあったけど、撤退したショッピングセンターの建物の有効活用ですと、市庁舎に使っている。この現実にはショッピングじゃなくてショッキングだったなあ。それに2011年9月に、誰も入場者のない原子力PRセンターの受付で、おそらく地元の娘さんが、「いらっしやいませ」と働いているのを見たときはやっぱり切なかったね。

そうそう、この本が面白かったんや。岡絵里っていう人の福島の話。壊れた第一原発、第二原発の近くまで行ってるんや。ジャーナリストに外から告発するというようなスタンスではなくて、そこに暮らしている人たちについて回って書いているから、なかなか面白かった。そう考えると、人間ってなかなかしたたかやし、事

故は起こってしまったんやから仕方ないと、後始末に引き続いて働いてる元の原発関連労働者。イレズミのあるような人たちなんだけど、意外とその人達がまともなことを言っている。

われわれもいろんなエリアを回ってるから、ちょっとずつ違う現実が動いているのが見えて、仙台なんかはある意味、支援先として関東の人たちには恰好なのかもしれない。被災もあったけど新幹線は早々に動いたし、東京から近いし。もちろん仙台でも沿岸部は大変だったけど、岩手とはまた違うね。

中村：ニーズの裏表なんだけど、家族支援なんで、その中にはいろんなものが含まれていますよね。私にもまだ十分には見えてない。介護の話とか、後から自衛隊とかわかってはくるんだけど、パートナーシップの相方ともこうした意図での対談をしたらどうかな。もっと話して共有したらいいよね。べたっと十年というより、リフレクションしながら。

村本：出版に向けて、今年、むつに行くときに、インタビューというのか座談会のようなものができたらなと思ってるんだけどね、何を聞くのがいいんだろ。

中村：むこうには何が見えているのか。あれやこれや。

村本：まずSさん、それから可能であれば、続けて参加してくれている若い人たちとかね。

団：図書館の人とかね。

中村：家族研究のなかではね、東日本と西日本では家族の文化がまったく違うというのが定説になってる。文化が違うらしいので、東北の家族の研究をちょっと見てみようかと思ってるだけ。

団：家族療法ってどうも関西風というか、西日本の方が入りやすいという説がある。家族療法でワッといろいろ言うやつは関西から出てくることが多いというのが業界定説なんだけど。それは同和問題の影響がものすごく大きくて、家族援助とかのベースの認識に違いを与えているというのを最近どこかで聞いた。

中村：ジェンダーもそう。西日本発なんですよ。東日本は海外から直に入ってくる。同和地区の存在が違うからね。在日とも関係してるかもしれない。ちょっと理論的には調べなあかんけど。ミニューチンにしても、やっぱり家族文化が強いところで家族療法がでてくる。

団：東の方は契約的ファミリーなんじゃない。約束のことを重んじる気風があるかもしれない。知らんで。

10. やはり理論が欲しい

中村：最初に戻るけど、セオリーのこと。

村本さんが責任を持って、この辺で整理しておかないと。十年というインパクト。

団：十年と言っても、最初には不確定要素しかないなかで、やるなかでだんだんとできていくもの、それこそが支援的であるというそれにはまったく賛成で、医療モデルの治療やら回復やらとは違うもので。どんなふうに回復していくかは相手が決めることで、だからと言って、好きにしてというのでもない。向こうは十年後のことなんか考えられへん、こちらにも計画があるわけではないけど、あなたたちにも十年後がありますから、その時によい今を生きてくださいと。泥かきしてるときには、そんなこと言われへん。

村本：トラウマの臨床していると、十年単

位で見れば、少しずつ人は変わっていく。今、この人どうなるんだろうと途方に暮れても、十年経つと人は案外しっかり生きていたりする。今は大変でも、十年というスパンで見たら希望が見えるかもしれない。

中村：トラウマ後成長（PTG）というものもあるし。十年経てば、誰しも賢くなるし、十年生きてたってことが重要なんじゃない。いろいろ拾えたらいいけどね。対人援助の進化を。おもちゃ美術館の支援の仕方とか、被災地の居場所づくりで紙コップではなく陶器のコーヒーカップがやはり暖かい印象になるとかの微細さとかね。他にも掘り起こせるものがあれば。